

《史料紹介》

『お千代物語』 その一

写本『薩摩国千代物語』

はじめに

江戸時代、薩摩国において、浄土真宗はキリスト教と同様に禁じられていた。しかし、これまた隠れキリシタンのように隠れ門徒（浄土真宗の信者）が存在したことも、明かな事実であった。これは、お千代という隠れ門徒の殉教の物語である。詳しい解説は、「その三 版本『おち千代物語』」の稿に記す。

ただ、この話は版本になる前に写本で、かなり広範囲、極端に言えば日本中の門徒たちの知るところとなっていたようである。本文を比較してみると、写本の物語同士は、かなり似通っているが、版本にする際にかなり手が加わっている。よって、まず、手許にある「天保二辛卯霜月

服部 齋藤 聖仁

十四日／書写之者也／米沢上萩村」という識語を持つ写本を翻刻紹介する。

書誌

内題…「薩摩国於千代物語」。

体裁…写本。大和綴。

横中本（下折り目）。縦一四・六×横一九・二糎

（版本と違って化粧裁がしてなく、美濃紙半裁の二つ折りであるから、版本の中本よりも大きい）。

外題…「薩摩千代物語 全」。原、直書。

表紙…本文共紙。楮（素）紙。

遊紙…前一丁。ただし右下隅に、「爰二同国ニモ物語トテ／薩摩国於千

代物語」とある。書き損ないか。

識語…うしろ表紙見返しに、「天保二辛卯霜月十四日／書写之者也／／

／米沢上萩村」とある。

其他…蔵書印、序跋、絵なし。

### 凡例

一、旧漢字、異体字は、基本的に当用の文字を用いた。不確かな文字には、(カ)と傍訓を付した。

一、濁点、句読点、並列点、括弧は、私に施した。なお、原文に濁点が付いているものには、(濁ママ)と傍訓を付した。

一、第何丁の表、裏は、(2オ)、(5ウ)のように表示した。

一、改行は表記しなかった。

### 《翻刻》

『薩摩千代物語』 全(表紙)

(見返し)

爰二同国ニモ物語トテ／薩摩国於千代物語

(遊紙オ)

(遊紙ウ)

### 薩摩国於千代物語

爰二、九州薩摩ノ国ニ於テ、何ツノ頃ヨリ禁メサセラレケルニヤ、浄土真宗ヲ、殊ノ外禁メ玉ヒテ、切支丹同様ニ害死トセラレケルニヤ。親鸞聖人ノ勸化、普クシテ、法流一天四海ニ弘リテ、風ニ草木ノナビクガ如ク、御繁昌有二セラレ、然ルニ、薩摩ノ城主松平豊後守殿家中ニ、青木清助トテ、知行五百石ノ侍ヒ有リ。一人ノ娘ヲ持、其ノ名ヲ於千代トテ、賤シカラザル育チナリケルガ、宿善目出度、仏法ヲ厚ク敬ヒ、中ニモ浄(1オ)土真宗ヲ皈依シテ、法義ヲ大切ニ喜ビケルガ、然ルニ、国ノ掟キビシケレバ、表ニ虚シ。讃談難儀、爰ノ山ニ花見ト云テハ、友ヲ誘ヒテ談合シ、彼ノ御影ト名ヲ付テハ同行ヲ集メ、終日ノ会合ニ信相続シ、人目ヲ忍ビ、厚ク喜<sup>ホシ</sup>フコソ、宿善ノ催シトハ云ヒ乍ラ、イト殊勝ナル事也。有時、同覚悟ノ同行ヲ求メ、云フヤウハ、「誠ニ、カ、ル尊キ御法リヲ聴聞シ、別シテ女人ハ、男子ニ増リテ深キ罪ノ有ル身乍ラ、御不思議ニテ、頼ム一念ノ信発ル時、此ノ世ニ有リ乍ラ、早ヤ仏ノ方ヨリ、往生程(1ウ)ノ一大事、御定下サル、廣大ノ御慈悲ヲ蒙リ奉リ乍ラ、京都御真影様ヲモ、善知識様ヲモ拝ミ申サズ、虚ク過グル事、勿体無キ次第也。何卒以テ、御本山様へ参詣至シ間敷ヤ。」ト申シケレバ、皆々、「尤。」ト思ヒケレドモ、国ノ掟厳シケレバ、「如何シテ参ルベクヤ。」ト申シケルニ、「唯ダ何ニト無ク、都見物ト云テ参詣スベシ。元ヨリ国ノ御法度ナレバ、ヨモヤ御本山へ参詣トハ、誰レ知ル者モ無ク。」ト申シケレバ、人々、「尤。」ト思ヒ、

夫ヨリ旅ノ用意ヲ至シケル、心ノ内コソ尊トケレ。頃ハ寛政五年丑ノ  
(2オ)年、於千代ハ今年十八歳ニテ、海路恙ガ無クシテ、京都ヘ登  
リ、子ノ母ヲシトフガ如クニシテ、漸ク御真影様、善知識様ニ御礼  
ヲ遂ゲ、歎喜の二余リ、嬉サヤン方無クシテ、今ハ心ニ残り無シト  
テ、本国サシテ皈リケル。イトモ哀ニ思ヒケル。然ルニ、三年程ハ知  
レザリシニ、何者ノ訃詔シケルニヤ、於千代廿一歳ノ秋、此ノ事顕レ  
テ、御呼出シニ逢ヒ、浮目ニ逢ヒ(ケ)レバ、寛政七年七月朔日ヨリ、  
吟味役人長谷部常弥ト云人、知行五百石、筆取役人(2ウ)井ノ原  
長八トテ三百三十拾石ノ侍ナリ。其ノ外、役人廿七人ニテ、御吟味仰セ  
付ラレケル。

知行五百石 青木清助娘千代

同三千二百石木村立会妻セン

同木村初右門 同藤蔵

右四人御呼出シ、吟味役人長谷部常弥、千代ニ申サレケルハ、「何ニ  
ト心得テ、国ノ御法度ヲ破リ、殊ニ国ノ掟トシテ、切支同様ニ仰セ出  
サレケル浄土真宗ヲ深く信ジ、京都迄デモ(3オ)参詣至シ候哉。  
何者ナルゾ、何故ノ訳ゾ、ツ、マズ申シ上ヨ。又タ頭取ハ誰ナルゾ、  
明白ニ申シ上ゲヨ。」ト申サレケレバ、千代、申二ハ、「頭取ハ私也ニ  
テ御座候。何ニノ訳ト申ス事モ、無御座候。私シドモハ、女ノ身ニテ  
候ヘバ、五障三従ト申シテ、人サマノ知り玉ハヌ処口ノ、深キ罪咎ノ  
有ル我等ニ御座候。是ニ依テ、何卒未来ヲ助リ度ク存ジ候故ヘ、称讃

浄土教、又ハ法花経ト申ス御経迄請習ヒ、又タ其ノ謂レヲ承リ候ヘバ、  
女ノ身ニテ、未来ノ助ル御法リ、御(3ウ)座無ク候。夫故、中将  
姫モ世ヲ退テ、当摩寺ニ至リ玉ヘテ、丈ケトヒトシキミドリ髪ヲ剃リ  
落シ、出家遂ラレ、自力ノ修行ナサレシカドモ、自力修行ハ中々及バ  
ヌ故ヘニ、終二ハ、弥陀ノ本願ニ皈シテ、正念ノ往生ヲ遂ラレケルト、  
受玉<sup>ウケ</sup>ハル。私シ如キ、罪深キ障リ重キ身ハ、弥陀如来ノ本願ヲ頼ミ、  
成仏セヨト有ル御教ヘナレバ、誠ニ私シガ我ニ相応シタル救ヒニ随ヒ、  
弥陀ノ本願ヲ頼ミ、疑ヒ無ク信ズル者ヲ、變成男子身ヲ替ヒテ、男ト  
無シ、極楽ヘ(4オ)迎ヒ取り、楽ヲナサスベシ。若、我ヲ頼ミ、  
地獄ヘ行カ、又ハ變成男子ノ願カ、仮リナラバ、我モトモニ地獄ヘ落  
テ、若シ共ニ受ケント有ルアミダ様ノ御心心故、其ノ本願ノ尊キニ、  
国ノ御法度ヲ打忘レ、浄土真宗ノ御安心ヲ深く信ジ、京都御本山様ヘ  
モ参、尚ヲ又タ、蓮如上人様ノ御文五帖一部ノ謂レヲモ、聞仕候ヘバ、  
尚々御恩程尊ク、御慈悲ガ難有存ジ、一心ニ念仏申候。」ト、己ヲ  
忘レテ、有リノ俣ヲ申シケレバ、常弥殿申サレ候ハ、「四人ノ者(4ウ)共、  
今ヨリ後ハ心底ヲ改メ、浄土真宗ノ教ヒヲフツト思ヒ切り候々。  
夫ヲ申シ立テ、命チハ御助ケ有ルヤウニ願ヒ上ゲ候間ダ、急度相改申  
サレバク。」ト、有リケレバ、其ノ時キ、千代申シケルハ、「難有御情  
ニハ御座候得共、一旦、国ノ御法度ヲ破リ候得者、迎テモノガレヌ我  
等ガ事ニ御座候ヘバ、親鸞<sup>ウケ</sup>聖人ノ御教ヘヲ受、金剛堅固ノ信心ニ落付  
候ヘバ、一刻モ早ク浄土参リガ至度、願居申候。兼テ私共ノ身ノ上ハ、

仏様や聖人様へ、未来（5オ）「往生ノ一大事ヲ御頼申候。定ノ信心ヲ得テ、未来ノ程ハ、今ニモ露ノ命ノ終リナバ、極（楽）参リト覚悟至シ申シ候へバ、少モ心底ヲ改ル所存、無御座候。奴一旦ノ命助ルガ嬉イ迪テ、未来ノ大事ニ替ヒガタク存候。喩へ、此ノ身ハ海川淵へ沈ムトモ、病ノ床ニ死ルトモ、仏様ノ御助ケニ違ヒ無キ身ノ上ニ而候へバ、此ノ嬉シサガ身ニ余リ、心底ヲ改メ申ス事ハ、思ヒヨラヌ御事ニ御座候。只今、此ノ処ニテ、御仕置ニアヒ、命ヲ終リ候得バ、直ニ（5ウ）「浄土へ参リ候コソ、此ノ上モ無キ喜ビニテ候。都テ金剛堅固ノ事ハ、武士ノ上ニモ有之候事ニテ、心ハ鉄石ノ如クニテ礪イ、如何様ナル事有ルトテモ、ニタ心無キヲ金剛ト云ト、幼少ヨリ聞覚申候。此ノ世ノ命、ヲシイトテ、心ヲ改メ候々。待ナラバ、二人ノ主ヲ取り、女ナラバ、両夫ニマミエルガ如クニテ候へバ、全ク改ル心口、是レ無ク候。」ト、イサギヨクコソ申サレケル。常弥殿申サレ候ハ、「是悲モ無キ事ドモ也。獄人ニ限ル覚悟ヲ至セヨ。」ト有リケレバ、（6オ）「千代申候ニハ、「誠ニ難有御情ケニテ候。夫ニ付、暫ク御暇シ下サレベク。」ト、役人衆へ願へ上、紙筆ヲ望テ、薩摩七十二万石ノ女人往生ノ先達ナレバ、国中ノ同行へ、喜ビノ種ヲ残シ、女人同行へノ形見ニナスベシトテ、

△南ニトシテモ、我レヲ助ケン為メニト  
テ、南ムアミダブノ、イカイ御世話ニ  
△無用ナル、世間咄シヲサシオキテ、南無

アミダ仏ノ御名ヲ唱ヘヨ。

△阿サタノ鐘ヤ、タエコノ呼声ヒニ

南無アミダ仏ノヘンシシテ居ヨ。（6ウ）「

弥ノ為メト、思フ心口ノ有ルナラバ、南無

アミダ仏ノ所作ヲシナガラ

陀キマゼテ、助ケ玉ヘル信心ヲ、南無

アミダ仏ト御恩喜ベ。

仏法ノ、錦キニツ、ムタカラコソ、南無

アミダ仏ノ謂レナリケリ。

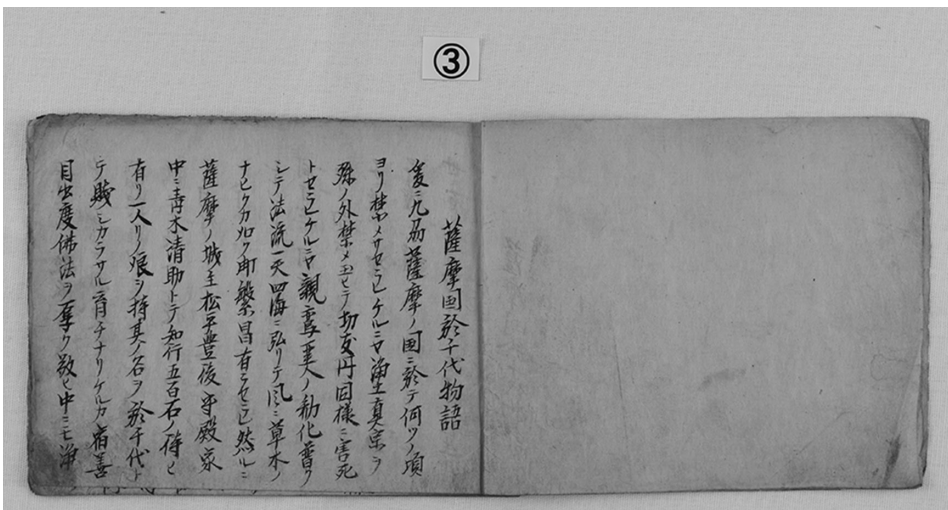
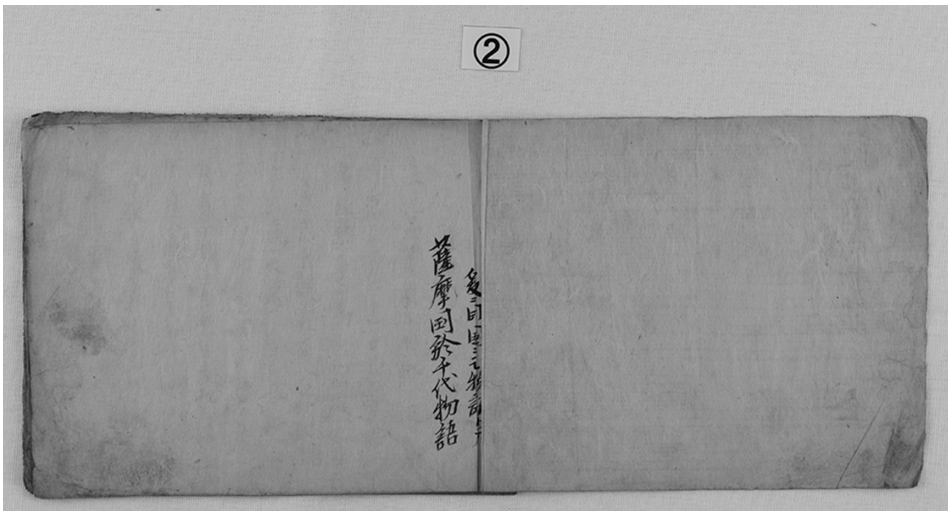
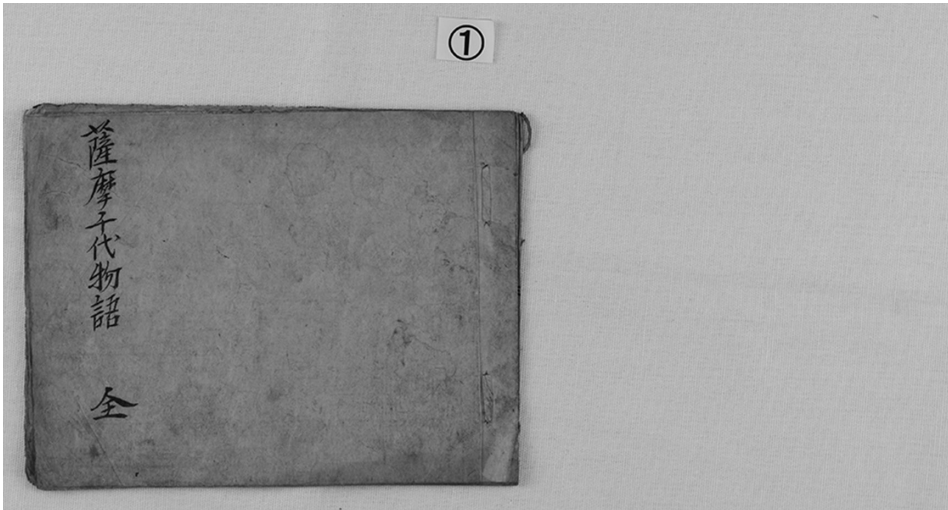
カクノ如ク弁舌ヲ残シ、西ニ向フテ、暫ク称名念仏シテ、終ニ、寛政八年辰ノ七月四日、廿二歳ヲ一期トシテ、朝ノ露ト消ニケル。誠ニ、ユ、シキ覚悟也。無サント云モ、余リ有リ。昔ハ、住蓮坊・安樂坊、念仏申セシ罪（7オ）「ニヨリ、御死罪ニ逢フトカヤ。松虫・鈴虫ノ如也ト、皆々、泪ヲ袂ニシボリ、弥々近国ノ同行、厚ク喜ビケリト也。実トノ信心ヲ得タル身ハ、カクコソアリタキ者也。ケ様ノ事ヲ聞クニ付テモ、弥増ニ、金剛ノ信心、領解アレカシト書キ玉リテ、千代ヲ手本ニシテ、堅固ノ信心ヲ得玉ヒテ、弥々広大ノ御恩ヲ喜ビ玉フベシ、ト云云。（7ウ）」

天保二辛卯霜月十四日  
書写之者也

米沢上萩村

（うしろ表紙見返し）

『お千代物語』  
その一





④

去真事の般依シテ法費ヲ大切ニ志  
シタルガ然レ國ノ旋キヒシケルニ夜ニ夢  
齋終難成後ノ山花見氏ノ女ヲ  
誘ヒテ談合シ彼卿影ト名ヲ附  
ス同行ヲ集メ終日ノ會合ニ信相統  
シ人目ヲ忍ビ尋ナキモアヲノ籍言ハ僅  
シトモモテライト殊勝ニ度ニ有時  
同覺悟ノ同行ヲ承メテハ誠ニカレ  
尊キ御法リヲ聽聞シ別ニテサ人ノ男  
子増リテ淫キ罪有ル身ヲ御不  
思議ニテ類ニ念ニ信益ル時キ元ノ  
世ニ有リテ早ヤ修メテ方ヨリ性生程  
ノ大事即達下サル應父人即慈慈ヲ  
承リ奉リテモ京都御真影様ヲ元  
善知識様ヲモ拜ミ申サテ空ノ過ケル  
事勿体ナキ次第ニ伺申シテ即本山様  
ハ參詣至ニ間敷ヤト申シケルニ花白々  
右ト思ヒテトモ國ノ從嚴シケル獨  
シテ參ルヘクヤト申シケル唯タ何ト云フ  
都見物トテ參詣スヘク元ヨリ國即  
法度ニ台モ即本山參詣トハ誰  
レ知ル者モ希クト申シケル人々モ思  
ヒテ又ヨリ旅ノ用意ヲ至シタル心ハ  
コソ尊トケル頃ハ寛政五年早

⑤

年終于代令年八歳ニテ海路  
悪カキヲミテ京都ニ登リ子母ヲ  
シトカカリシテ漸ク御真影様  
善知識様御礼ヲ遂ケ般光御  
余リ遊サヤニ方々シテ今ハ心疲  
リシトテ本國サシテ取りケルイ  
トモ長思ヒケル然レ三年程ハ知  
レサリシ何者ノ新詔ニケルニヤ於  
于代八歳ノ秋元事顯ニテ御呼  
出シ逢浮同ニ逢ヒ廣政七年  
七月朔日ヨリ吟味役人長谷部  
常務役人知行五百石筆取役人  
井ノ原長ハトテ三百三十拾石ノ符ナリ  
其外役人女士ニテ吟味役人  
コレケル  
知行五百石 青木清助長于代  
付三千五百石木村立會毒セシ  
月木村初右門付藤藏  
右又御呼出吟味役人長谷部  
常務于代申サレバ何ト心傳テ  
國即法度ヲ破リ殊ニ國ノ旋トシテ  
切安同様ニ備セ出サレケル修土  
真宗ヲ深ク信シ京都ニテモ

⑥

參詣至ニ候哉何者モソノ何故  
ノ欲ツクモ申シヨリ又タ頭取誰  
モソ明白申シ上ケト申サレバ于  
代申ハ頭取ハ我ニテ御生後何ノ  
詔ト申ス事モモ御生後何トモハ  
サノ身ヲ候ハ女障ニ從ト申シテ  
人サノ知リ云々処ニ深キ罪外ノ  
有レ我等御生候是依テ何事  
モ申サテ助リ度ク存シ候故祿負  
淨土經又ハ法華聖ト申テ御至  
修習ニ又多々謂テ兼リ候ハ  
サノ身ヲモテ早ノ助レ御法リ即  
坐ヨリ候又故中將様モセテ退ラ  
者摩寺ニ至リ又テ丈ケトヒトシキ  
ミトリ髪ヲ剃リテ落シ出家遂ニ  
自カノ修行ナレシカトモ自カ修行  
分々及又故ニ終ニ殊院奉取  
ニ候ニテ正念ノ性生ヲ達シケルト  
後云レ初レ如キ罪深キ障リ重キ  
身ハ殊院奉取奉取ヲ頼ニ成仏  
セヨ有御效ナレ誠ニ我レ方我レ  
相惑シタレ故ニ隨テ殊院奉取  
ヲ頼ニ候ニ言フ信ス者ヲ度成  
男子身ヲ替ヒテ男トシテ操業ヘ

⑦

迎と取り葉ヲナクシテ若我ヲ  
頼ミ地獄ニ行カヌ後成馬子ノ  
取カ臨リナラ我モトモ地獄ニ落  
テ若シ共ニ受ケルト有テアサキ  
卿心故其ノ本氣ヲ守テ國ノ卿位  
度ヲ折テ降シ其ノ常ノ卿位  
ヲ深ク信シテ都御本山様ニ參  
尚ヲ又々蓮花大様ノ御父五帖都  
ノ謂レテモ甚仕候ハ内々御恩程  
尊ク御慈悲カ難有存シ一心ニ侍  
佛申候トモ忘レテ有リノ候ヲ  
申シテハ常御殿申シ候ハ人者  
共今ヨリ後心度ヲ改メ降シ其ノ  
ノ教ヲフツト思ヒ切リ候々又申シ  
五テ余ナ卿助ク有テワシ取トテ  
候間タ急度相改申サレト有  
亡其南キ子代申シテハ難有  
御情ニ御坐候得共且因御法  
度ニ被リ候得有連テモカレヌ  
我カ事御坐候ハ親重事大  
ノ御教ヲ受金剛堅固ノ信心ニ  
格守候ハ一刻モ年々淨土參  
リカ至度取若申候兼テ私共  
ノ身ノ上ニ榮様ヤ垂人様ニ事

⑧

存生ノ大受ヲ御頼申候莫ノ  
信心ヲ得テ来ノ程ハ今モ露  
ノ會終リナ極楽ノ道悟至  
申候ハ心モ心度ヲ教ハ則存  
ニ御坐候一且ノ會御カ境イ  
進ニ事来テ大事ニ誓ヒカ多存候  
前ニ元身ハ海川湖ノ御カモ病  
ノ疾ニ死ルトモ榮様ノ御助ケ遠  
ト幸身ノ上ニ御候ハ無疎ニサカ身  
ニ余ノ心度ヲ改メ事々事ハ思ヒヨ  
シテ御坐候御坐候只今此処ニ御  
仕置シテモ會々終リ候得ハ通  
存ニ參リ候コソ無レモ幸甚  
テ候都テ金剛堅固ノ事ハ或上  
ノ上モ有テ候受テ心ニ教カ如  
シテ候テ荷様ナレ度有レトモ  
ニタ心ニキテ金剛山ト幼女ヨリ因  
寛申候亦モ余ヲシテ心ニ  
改メ候々待ナハ二人ノ生ヲ取リサ  
ナハ兩文ニミエカ如クニ候ハハ  
全ク改メ心是レニテ候トイサキ  
ヨクコソ申サレテ常御殿申サレ  
候ハ是慈悲モ言キ受テモ人  
ニ長ル寛候ヲ至セヨト有リケバ

⑨

子代申候ニ誠ニ難有御情ケニ  
テ候又ニ年暫ク御服ヲ下サレハ  
ト役人衆ノ取立然筆ヲ望ミ薩  
摩七十二名ヲ夫人存生先達ナ  
ハ圓中ノ行行ニテ種々歎シカ  
人可行ハ敬見ニテスレトテ  
△市ニトシテモ我ヒラ助ケシ勢ニト  
テ而ムア多フノイカイ御坐話ニ  
△會用ニ在間略シテサシオキテ市ニ  
ア多松ノ御名ヲ唱メヨ  
△百サダノ鐘ヤタエコノ時モ花ニ  
市ニテア多松ノ人シテモ有ヨ  
殊ノ身ヲ思フ心ヲ有レハ市ニ  
ア多松ノ所作ヲシナカラ  
院キテセラ助ケヌレ信心ヲ市ニ  
ア多松ト御思モ  
△信法ノ錦キニツムタカラコソ市ニ  
ア多松ノ御名ヲ唱メヨ  
カクカク年々ラ歎シ西ノ白テ  
暫ク移シ念佛ニ然レ寛政八  
年辰七月廿四日一歳ヲ期トシ  
テ朝露ト消ニテ誠ニシキ  
眞信ニ言サシハモ有リ有リ首ハ  
任蓮坊安富坊念仏生セシ龍



⑩

ヨリ即死罪ニ違フトカヤ成虫  
 鈴虫ノ如クト皆ノ消ヲ殺ニシテ  
 殊ニ近國ノ内行存ヲモセケリト  
 更ト信心ヲ得ル身ハカクワアリ  
 タキ有レケ様ニ変ラ固クニ守テモ  
 弥増ニ金剛ノ信心領解アカセト  
 書キ五リテ年代ヲ示シテ是固  
 ノ信心ヲ得モテ殊ニ廣大ノ即見  
 シテモ五フヘシト云

天保二年 霜月十四日

書寫之者也

米澤上萩村

⑪



